

#S5 シオン篇 -T.C.4765-

日常のひとコマを彩る、ささやかな対話――
そんなものの価値に気づくのは、
いつも、その機会が永遠に喪われてからだ――
でも――
喪われた対話を、続けたいと望むのなら――

#S5 シオン篇 -T.C.4765-

ケビン：――まだ残ってたのかい？ 無理して体壊しちゃ、なんにもなんないぞ。
シオン：明朝までにどうしても纏めておきたいデータがあったものですから――
ケビン先輩こそ、こんな時間までどうされたんです？
ケビン：――悩み事があってね、なかなか寝付けないんだ。
シオン：悩み事？
ケビン：明日、いよいよ KOS-MOS が目覚める。その姿を見るのはとても楽しみなんだけど、目覚めた彼女に
なんて声を掛けたいか――それで悩んでいてね、おかしいだろう。
シオン：おはよう――でいいんじゃないですか。
ケビン：おはよう――か。
シオン：朝起きたらやっぱり、おはようですよ。
ケビン：そうか――” そうだった ” ね。ありがとう、これでぐっすり眠れそうだよ。
シオン：よかったですね。
ケビン：君も早めに休んでおくんだぞ。
シオン：はい。

ケビン：じゃ、おやすみ。
シオン：——おやすみなさい。

これが二年前——
二人だけでかわした、最期の対話だった——
その翌日に訪れる惨劇を、
幸福だったこの時の私は、まだ知らずにいた——

ケビン：———よし、手順の確認はこれくらいでいいだろう。
シオン：いよいよなんですね、主任。ついに KOS-MOS が起動する。
ジェシー：落ち着いて、シオン。これは私たちの到達点じゃない。やっと、折り返し点くらいなのよ。
シオン：は、はい、そうですね。
チャウ：いいのいいの！　こういう時くらい、みんなで盛り上がりなくっちゃ！
　　うちはチームリーダーが朴念仁のポーカーフフェイスだからね。周りが補ってやらないと。
ケビン：え、僕のことか———？
ハンス：他に誰がいるっていうんです。ま、ポーカーフフェイスはともかく、朴念仁は卒業したみたいですけど！
ケビン：ああ、ウヅキくんのおかげかな。
チャウ：うわ、そこまで言えれば、ご立派！　な、シオンちゃん———
シオン：え、え———
ジェシー：ほらほら、シオンで遊ぶのもその辺にきなさい。困ってるじゃない。
チャウ：別に遊んでるわけじゃ——ま、いいや。
　　ジェシー姉さんににらまれたら、明日から一局では生きていけないもんな。
ジェシー：そういうこと———あら、停電？
バンス：そんな馬鹿な、予備電源が三系統あるんだぞ。
チャウ：ちょっと見てくるよ。
　　うわあああああっ！
ジェシー：どうしたの、チャウ！　———！！
　　きゃあああっ！
U-TIC 機関員：全員床に伏せろ！
シオン：あ、あなたたちは　なんなんですか！？
U-TIC 機関班長：本施設はただいまより、我々 U-TIC 機関の制圧下におかれる。
　　少しでも抵抗のそぶりを見せた者は、理由の如何に関わらず、その場で即時、射殺する。

だが、抵抗さえしなければ、生命の安全は保障しよう。貴君らの協力に期待する。

シオン：――――

ケビン：（――動くんじゃない、シオン。ここは彼らの言うことを聞いておいた方がいい）

シオン：（は、はい――）

U-TIC 機関班長：――コンラッド、いるか？

U-TIC 機関員：はい、分隊長！

U-TIC 機関班長：いまから、そのカプセルの中の兵器を起動させる。貴様は、AI から OS を吸い出せ。

U-TIC 機関員：わかりました！

シオン：（彼らの目的は、KOS-MOS の OS なの？

でも、あの子はまだ、起動していないのに――）

なにをするの、やめて！

U-TIC 機関員：貴様、動くな！

U-TIC 機関班長：よし、起動した！

シオン：（起動した！？ そんなことができるデバイスを外部の人が持っているはずが――！）

KOS-MOS！

KOS-MOS：――――

U-TIC 機関員：なんだ――分隊長、こいつ、立ち上がりました！

U-TIC 機関班長：まさか――AI を起動させただけだぞ。なぜ、躯体が動く！？

KOS-MOS：――――！

U-TIC 機関員：な、なんだ！ こっちへ来るな！

U-TIC 機関員：うぎゃああああっ！

U-TIC 機関員：た、弾が当たらん、ぐわあああ！

ハンス：うわ、なぜ僕まで――

バンス：く、来るなああっ！

U-TIC 機関班長：くっそおおおっ！

ぐおおおおおおっ！

シオン：そんな――ハンス、バンスさん、みんな――

ジェシー：いやあああっ――

シオン：ジェシーさん！

ケビン：ダメだ、シオン！ 隠れている！

シオン：ケビン先輩、なぜ、なぜ KOS-MOS が――なぜですか――

ケビン：いまはそんな場合じゃない！ 生き延びることだけ考えるんだ！

KOS-MOS：――――

シオン：！　コ、KOS-MOS———
ケビン：危ない、シオンッ———！
ぐっ———
シオン：ケ、ケビン先輩っ！
ケビン：———
シオン：いやっ、いやあああああああっ！

シオン：はあ、はあ、はあ———
KOS-MOS：———
シオン：このグレネード弾なら、KOS-MOS———あなたの AI を破壊できるわ。
止まるつもりは、ない———のね。
KOS-MOS：———
シオン：わかったわ——たとえ死んでも、あなたを止めてみせる。
来なさい、KOS-MOS——！
KOS-MOS：———！！
シオン：（私に向かってくる瞬間なら、当てられる——そのときしかない——！）
KOS-MOS：———！！
シオン：———いまよ！
KOS-MOS：！！！！！！！！！！！！！！！！！！

ヴェクター・インダストリー第一開発局に設立された、
KOS-MOS 開発計画プロジェクトは——
その AI 開発チームのほとんどを失い、事実上、頓挫した。
いえ、頓挫したはずだった———

局長：シオン・ウヅキくん、君を KOS-MOS 開発計画担当主幹技師に任命する。
シオン：はい、お受けします———

かつて、あの人のものだった肩書さが、いま私のものとなった。

このプロジェクトからの転身を、幾人もの人が勧めてくれる。
でも、
それらの助言を聞き入れるつもりは、私にはなかった。
曙光に残されていたバックアップをもとに、KOS-MOSを完成させる。
——それが、
あの人との対話を続けていく、たったひとつの手段。
そんなうふうに、思えたから———